ドーピングの哲学
「危険な坂道、プレオネクシア（欲張る）と恥」
マイク・マクナミー（*Mike Mcnamee*）

平井　章*（訳）

Shou HIRAI

Doping : A Philosophic Inquiry（Slippery Slopes Pleonexia and Shame）

プラトンは、『**国家、第Ⅱ巻**』で有名なギュゲスの指輪の物語を伝えています。身分の低い羊飼いのギュゲスは、羊の群れを洞窟に入れて、後に盗むことになる美しい指輪をはめた死骸を発見しました。他の羊飼いと話している間、彼は自分の指をもてあそび指輪の石を回して自らを見えなくしました。自分の新発見の可能性に気付いて、彼は王の妻を誘惑するために指輪の力を使用して王国を乗っ取ります。次のプラトンの対話では、ソクラテスの対話者グラウコンはどんな健全な人でもギュゲスと同様であろうと主張します。物語は人が平和に暮らすところで正当に生きる生活の価値への鋭い対照効果を投げかけます。―しかし僅かな見返りで―富と権力と（少なくともそのように思える）幸福を生じさせる一方で卑しく生きる人と対照的に。繁盛する生活と倫理的に賞賛に値する生活との間に必然的な関係があるでしょうか？多くの点で、それは論議されるでしょう。ギュゲスの指輪の神話は、エリートスポーツのドーピング問題に直接類似します。

本章で私は、文献上でのドーピング慣行と実体、そしてそれらの反論に対する中心的な論議を試みようと思います。それからスポーツ倫理学の文献では展開されていませんが、危険な坂道の考えを紹介し、それがドーピング自由主義者に対する強力な論理的論議であることを主張したいと思います。最後にアリタイックな用語に戻りまたギュゲスの指輪の物語の道徳を参考にして、私は古代ギリシャ人が**プレオネクシア**と呼んだものの例として自身の競技能力が値しない品物や地位を不当に求める人たちの不正をはっきりと述べようと思います。明らかに矛盾しているかもしれませんが、私はエリートスポーツにおける恥ずべきことの洗練がドーピングのないスポーツの美点のための努力の中で競技者やコーチによる必要な自己規制の試みを助けるかもしれないことを主張します。

1．ドーピングの何が誤っているのか？いくつかの基本的な論議

人が思うようにドーピングの問題は新しいもの（ディメオ、2007；ホバーマン、2005；ヒューリハム、1999）ではありません。スポーツ倫理学の文献で、良く知られた一連の論議が見受けられ典型的に対立が和らげられています。それらを詳細に批判的に再検討することがここでの私の目的ではありませんが、次の項目の下で多かれ少なかれ説得的に書かれた著者の例を単に示そうと思います。すなわち（1）ドーピングはパフォーマンス強化に全て関係します。（2）ドーピングは更なるトレーニングを強制します。（3）ドーピングは不自然です。（4）ドーピングは強制的です。（5）ドーピングは有害です。（6）ドーピングは不正な利益を与えます。

（1）ドーピングはパフォーマンスを強化するが故に間違っています。

全ての反ドーピング論議で最も説得力に欠けるものは、スポーツバーやカフェでよく提案されるものです。それは、ドーピングがパフォーマンスを強化するが故に間違っているというものです。その立場は十分に分かりやすいものですが、二つのタイプの反論を明らかにオープンします。最初の例では、私たちが禁止リスト上に見る禁止物が本当にパフォーマンスを強化するのかを人は本当かどうかを尋ねるかもしれません。中でもニコルソン（1987）は、証拠が全く明らかでないと主張します。パフォーマンス強化の効果の多くはプラシーボ効果に至っていると彼は示唆します。彼は実は間違っているとスポーツ科学者団体が、彼は事実として間違っていると主張することは、正当であろうと思います。しかしながら、ドーピング物質あるいは過程によって引き起こされるパフォーマンスの強化のための説明を確認する立場では、私たちは多かれ少なかれ、それは多分真実かもしれません。対照的に、私には次のように思えます。スポーツの卓越―薬物又その他の方法による―は、極度の身体努力と同じ程度の人間の感情と心の複雑な生産物に違いありません。次に簡単に却下されませんが、この論議の様相は、そのような情報収集の大変な可能性を示します。もしx、y、zの物質がパフォーマンスを強化するだけでなく害を引き起こすと人が疑ったならば、人はそれを実証しようと試みる調査のための倫理的な承認をどのように獲得するでしょうか？だから次のように言われています。ドーピングの産物の豊かで確実な一覧表を得る最良な考えは、初期の段階で関連する規制当局によって研究

*　島根大学教育学部健康・スポーツ教育講座

の倫理的な承認を得るための能力の無さで駄目にされるでしょう。疑わしい物質が確実に妥当な方法でパフォーマンスを事実上強化することを知る時に、人は原則要求することが出来ないように思えます。

主として1980年代後半に、これらの論議が最初に提起されて以来、豊かで確実な資料を十分に獲得することを常に認められて、参加者への潜在的な害の理由で（マクナミー他、2007）、研究の倫理的な承認に関して懐疑的な態度にもかかわらず、パフォーマンス強化の産物と物質に関する実験的研究が確かに現れました。医学に関わる（例えばベーカー他、2006）と社会学（例えばモナハン、2001）両者のボディビル文化の最近の英国の研究は、ヘルスケアと医学関連のドーピングの乱用の範囲を超えた危険のはっきりした証拠を提供します。

（2）ドーピングは競技者に厳しすぎる、厳しいトレーニングを要求します。

いずれにしても、エリートスポーツは強化がすべてであって強化の薬学的慣習をなぜ特別に気にするのかと疑い深い人によって言われ続けてきました。全てのエリート競技者で上昇した地位にふさわしくないかなり多くは、必要以上の集中度、努力、スピード、強さ、あるいは論議中の様々なスポーツで重視されるどのような能力を求めて、自分自身のスポーツ能力の限界に自らを強制します。この問題への人の反応は、ドーピングは競技者により厳しい練習を強いるために間違っていると言われる考えです。

多くの世界で、わたしたちは、特別な焦点で、ほとんど超人的で偉大な目的を成し遂げる人々を賞賛します。懸命に働くためにドープする倫理的に問題のある競技者を見い出すべきでしょうか？私が記すように私が高度なカフェイン者かもしれません。つまり誰も悪くありません。非常に多くのコメディアンや音楽家は、幾多の精神的欠陥の苦しみがよく知られていてアルコールや他の薬、つまり大衆の強い抗議なしで支えられて聴衆者に向き合うことが出来ます。パフォーマンスを強化するためにスポーツでの化学的また薬学的方法が私たちの怒りをなぜ駆り立てさせるのでしょうか？さらに新しい設備への接近方法、高度な専門的なコーチングは、栄養学の知見や設備技術（アイソキネテック抵抗の機械また高圧空間のような）を増やしました。そんなに眉をひそめることなしでトレーニング効果は全て改善するでしょうか？私たちは他のトレーニング強化方法を奨励しますが、なぜ薬学的な強化は駄目ですか？と言われます。

（3）ドーピングは不自然です。

薬学的な強化に対する直接的な非難は、ドーピングが不自然であるという理由で間違っているという主張です。明らかに何が自然かはそれ自体で問題を含むものです。にもかかわらず、一貫性の理由でさえこれ以上「自然な」と思われる低酸素テントあるいは部屋での睡眠のような現実と手続きがなぜ承認されるのかを尋ねることが出来ます。（フリッカー、2005;ローランドとマーレイ、2007；スプリッグス、2005；タンブリーニ、2005；タンスジョー、2005　参照）

非難をオープンにする他の形の動向は、スポーツそれ自体が自然ではなく人工的なものであるという考えです。すなわちそれはプレイへの衝動の社会的仕組みと制度的なものです。ですから不自然なものとしてドーピングをなぜ私たちは心配すべきなんでしょうか？いかなる倫理的な有利さが相当する論議でしょうか？自然なものは良くて不自然なものは悪いということがもし不十分な仮定とすると、人は、ただそのような提案者に対して自然主義的な詭弁で論理的な刀を振りかざさねばなりません。簡潔に言えば、自然主義的詭弁は人が直接に事実の表明（そうであるもの）から道徳的結論（あるべきもの）へ考えを変えないと思っています。これは、私たちの自然な身体は自然であるので良くて不自然な身体は自然でないので悪い（あるいは同様に自然な能力は良くて不自然な／人工的な能力は悪い）という飛躍の間で不正になされる変更です。そしてもちろん結論は、（明らかに）自然な身体の限界以下になる人工的な肢あるいは交換関節を備えたものに関して防衛できない立場を生み出すに違いありません。誰かが出来る身体と身障者スポーツの両方でスポーツに携わる人たちへの影響を考慮できない自然主義的議論を単純に出すことを仮定するには理由があります。人工装具を付けた競技者がそうでない競技者（それは見た結果である）より劣勢であるという考えは、私たちの現代の平等主義にはたいへんしゃくにさわるものです。

にもかかわらず、私たち人間の本性が薬学的か遺伝かでドーピングの不自然さの観点において、十分にはっきり述べない尊敬を受けるに値するある見解があります。マイカ（2004）が正確に指摘するように、その一部はある種の想像上のフランケンシュタインの不合理な恐れに対する反対です。にもかかわらず、自然な論議に対する彼の特別な反対意見は、健全でありません。スポーツは、次の論争を引き起こす、人工投入から何とかして分離できるただ自然な能力を測るべきであるという次の主張に彼は注目します。

> 自然の定義は議論の余地があるので、この種の議論は、スポーツでの遺伝子変化の使用を禁止する理由を構築しません。確かに、ある種の人間は他の者より価値があるという結論を導くように思えることから、自然は良くて無意味な概念であり、悪くて潜在的に争いの種になることを示唆します。（マイカ、2004：151）

しかしながら、それが役立つかに対して、区別が必要でないことが絶対に明らかであると注目されるに違いありません。私たちは夜が明けるはっきりした要点を言うことが出来ません、にもかかわらず困難なしにその概念を適用することが出来ます。人は黄色から赤に変わる正確な要点を指摘できませんが、これは交通警官が交通信号

で止まらなかった運転者に切符を切ることを妨げるものでありません。概念というものは、議論の余地があるので様々な考えは、それ故に無意味なことは筋が通らないということです。教育の本質や目的があらゆる政治的なイデオロギーによって争われるような本質的に議論の余地ある概念（ガリー、1956）を用いることを考えてみて下さい。様々な議論の余地があるということは、無意味であることを表わすのではありません。確かに、マイカが不注意あるいは疑わしい概念の操作的展開を用心することは正しいですが、ドーピングに対する議論で規範的な自然らしさの利用によって毎日の生活で人工的か技術製品に頼る障害を持つ人々を私たちが必要以上に責めたり価値なしと考える理由になりません。これらの全てにも関わらず、私たちの正常な人間機能を強化する不自然な身体の考えは、多くの哲学者や科学者が同様に持つ問題です（註１）。私は、社会におけるバイオ医学の諸技術に照らしてより一般的に将来のスポーツとスポーツ倫理学を考察する時、特にこの考えを11章で再考しようと思います。

（４）ドーピングする人はしない人にドーピングを強要します。

薬の服用への強要を防ぐためにドーピングに関連する禁止は、正当化されることが競技者自身によって時々言われています。あるいはベン・ジョンソンのコーチであるチャーリー・フランシスは、良く知られているように「もし薬を服用しなければそれを作らないでしょう」と言っています。競技者がドープするのを認めることは、他の競技者の意志に反して同様なことを強要すると言われています。はっきりした強要論議と厳しい鍛錬論議の間には密接な関連があります。仲間が世捨て人のように家族生活の手本を避け、１日12時間、週５日、年間50週働く時、私たちはバランスの欠如を馬鹿にするように彼らの勤勉さを容易に賞賛します。私たちは次の推進会議で、彼らの労働習慣が今後前述の推進を達成しようと思っている人々に強制的効果を持つという理由で、その推進は超勤勉さに進むべきでないと言う根拠を持つでしょうか？（註２）どんな古い社会的な圧力も強制的なものとして考えられないかもしれません。しかし強要が当事者の自由に対して誤った制限のようなものを意味すれば、その場合人は、「強要者」のなかにドーピングを勧められた競技者として仲間を捜し出す強い圧力を感じるかもしれません。どのような感覚で彼らは相手に強要するでしょうか？トレーニングやパフォーマンスへのドーピングの自由の選択を簡単に選ぶ清潔さは出来ないでしょうか？むしろ参加への自由な選択は駄目で法的で正当な方法での参加はまだ可能ということでしょうか？私たちは、大変長時間後にワークステーション、図書館、パソコンへのアクセスを妨げられるべき内臓を壊した人（gut-busting）、労働生産性向上の仲間には言いません。例え彼らの勤勉さの狭さを馬鹿にしても、私たちは彼らの自立性を尊重します。そして一貫性の点で、もし私たちの議論は本当に他者が私たちを悩ませる関心についてであれば、赤血球の生産を増加し、身体への酸素供給を改善するためにより多くのマイルや高い気候の中で走る競技者、より長い距離を泳ぐ泳者、酸素テントで眠るクロスカントリースキーヤーのような全ての実践者に適用すべきものです。空気力学的帽子をかぶる自転車競技者、ファーストスキンを着用する泳者、年齢や体型にふさわしくなく、しばしば心理的安寧に深く蝕む常軌を逸脱した形態学的規準を達成するためにカロリー調節によって身体を鍛錬させる女性体操競技者はどうでしょうか？サラブレッドには最適と調教師が信じる体重を達成するために無駄に使うこと（過度な絶食、サウナや喫煙による減量）を「強要される」騎手はどうでしょうか？

（５）ドーピングは有害です。

強要の論議は、それ自体でより一般的な薬物禁止（及び小さな違いを考慮して規則で認められない他の申し立てによる非倫理的な実践）の正当性、競技者への害を防止することに関連します。要求される筋肉増強剤は、関係する競技者に有害です。さて、ある筋肉増強剤や手続きは有害であるという正当な合意がある一方で、上述したように全ての禁止薬物が有害であるか少なくとも必要以上に害があるのではありません。医学の下での血液ドーピングはそのような例を提供しないでしょうか？（確かに1970年代と1980年代の東ドイツのドーピング疑惑のより丁寧な報告がありますが、）（註３）

仮にドーピングの産物や物資が有害であったことが本当でも、害がその活動に内在しまた重要度で統計的に関連する場合、ドーピングに関連した一連の害について、なぜ私たちが悪意を感じ黙認しないかのような、また他のスポーツに対する慈悲深い承諾に反対するような質問に再び答えなければならないでしょうか？ドーピングするエリート競技者によって引き起こされてきた害の大きさと正当な方法でスポーツに携わるけれどもその後長く重大な損傷を衰弱しながらボクサーを続ける完全装備のボクサーを比べてみてください。同様な騎手と競走馬の馬術スポーツからの死についてはどうでしょうか？地面やラグビー、アメリカンフットボールで他の選手との強力な接触から引き起こされた障害の多くの対麻痺者についてはどうですか？より劇的でありませんが、関節炎の足首、お尻や膝を持つ世界中のフットボール選手軍団はどうでしょうか？私たちはここで害の大きさをいかに正直に考慮しないのでしょうか？

強要に関する議論で容認できないと思われるかもしれない一連の他の実践で、私たちは自らがこの問題に直面したことを見出します。つまり「スポーツでの『温情主義的妨害』の限界は何でしょうか？」この質問に対する満足な回答を探すことは、合理的に反対されるかもしれないドーピングの禁止に明らかに優先するかもしれません。

（6）ドーピングは不正な利益を与えます。

恐らく、ドーピング禁止を支持する最も普通に議論される規準は、ドーピングを経験する人々に不正な利益を指摘するという論議でした。その禁止は物質と手続きの効果に基づくと仮定してみましょう。この点で、私たちは薬物使用の競技者に生じる利益の事実を除外することが出来ます。不正論議に対する標準的な立場は、懐疑的な一つの不一致です。つまりスポーツ界にいっぱいある不正な利益、薬学的なそれがなぜ悪いのでしょうか？直ちに心に浮かんでくる例を出します。優れた酸素供給能力を開発する高地で生まれた競技者について私たちはいかに言うべきでしょうか？精巧な技術支援システムに頼れる裕福な国で生まれた競技者についてはどうでしょうか？多国籍企業あるいは相対的に衰えた相手と比べられる多国籍企業また億万長者のパトロンによって後援されるチームについてはどうでしょうか？

恐らく、全ての不正論議の中で最も問題なものは、優れていることが遺伝子組み換えの産物であると予め受け入れることに関するものです。それは、私やあなたが素晴らしい遺伝子プールから利益を得るずっと必要以上の長所あるいは公正でないかもしれません。その限界に競技の優秀性に直接貢献した身体的な異常を持って生まれたイロ・モンティランタとミゲル・インドレイン（註４）両者の場合を考慮してみてください。イロ・モンティランタは、1960、1964、1968年のオリンピック大会で三つの金メダル、二つの銀メダルそして二つの銅メダルを勝ち取り、また当時の世界選手権で同様に高得点を勝ち取ったフィンランドのオリンピックスキー選手です。彼は明らかに驚異的なスキー選手でした（註５）。疑いなく、彼の全く例外的な能力の一部は、バイオ医学的な異常に基づくものでした。モンティランタは、家族性の遺伝病スクリーニング（デ・ラ・チャペル、等1993）中に発見されて、より持続的な最大能力を許すEPO受容器での突然変異のために不自然な高レベルのヘモグロビンを持って生まれました。次にツール・ド・フランスで５回勝者となったミゲル・インドレインの場合です。すなわち、

> 経歴の絶頂期に、ミゲル・インドレインは、一般の人との統計的な規準での比較だけでなく彼の競技仲間との比較でも異常な体格を持っていました。彼の血液循環は、普通の人の平均総量3-4リットルまた彼の仲間の選手の平均総量5-6リットルに対して、全身に毎分７リットルの酸素を循環させる能力を持っていました。またインドレインの肺活量は、平均６リットルと比較して８リットルでした。さらにインドレインの休止パルスは、正常な人間の60-80bpmに比べて29bpmと低く、それは彼の心臓が険しい山岳段階でも緊張していないことを意味しました。彼の最大酸素摂取量は、88ml/kg、であり、それに比べてランス・アームストロングは、82ml/kg/分でした。（ウイキペディア、2007）

スポーツ界は、競技者とチームが同じ検査を競技中は共有するので一般にそれ自体が手続きの公平性に関係します。しかし不公平が試合に先立っていっぱいあります。その時になぜドーピングが悪いでしょうか？

私は今、反ドーピングの立場を支持する禁止と二つの美徳倫理の考察を守るために、よりしっかりとしていると思えるある論議に向かおうと思います。

２．ドーピングと滑りやすい坂

ドーピングの倫理に関する豊富な文献の中で調査された私の知見に対するものでありませんが、ドーピングを構成する禁止物質と手続きを許すというある論議は、それらが滑りやすい坂に私たちを導くことになるだろうという考えです。人はこの論議が十分わかりやすく、私たちがいわばそれを適用して行く必要があると考える一方で、私は躊躇したいと思います。滑りやすい坂の論議を理解することは、全くわかりやすいことでなくドーピングの問題にそれらを当てはめる前に多様な概念上の地理を注意深く図式化する価値があります。

シャウアーは、次の滑りやすい坂の論議の本質論者的分析を提供します。「純粋な」滑りやすい坂道は、「単独の場合、見かけ上は無害な特別な行為も同様な将来の主役になるかもしれませんが、だんだん有害な出来事になるかも知れない」ものです。（1985:361-2）人工中絶と安楽死は、公的な議論と政策立案における滑りやすい坂の古くからの対象です。しかしながらこれに対しては、坂を下った将来の出来事（法律あるいは政策）が類似性－等しく望まれなかったけれど結果として、それらが異なることに全般に結び付いたことを人が提案するかもしれない－を表示する必要のあることを支持する理由がありません。薬学また他の技術的規制を持たない人々によって提案される膨大な配列の強化は、それらの異成分のために滑りやすい坂の概念では捉え切れないかもしれません。（註６）

極端な広がりを持つ原理は、以下のように区別される後者のバーナード・ウイリアムズの一対の滑りやすい坂の下で包括されるかもしれません。すなわち滑りやすい坂の（１）悲惨な結果と（２）任意な結果の論議。ウイリアムズによれば坂の底の性質は特別な論議が支配されるカテゴリーを私たちに決定させるというものです。明白には最も共通な形は、滑りやすい坂が悲惨な結果になる論議です。ウォルトン（1992）は、さらに滑りやすい坂の悲惨な結果の三つのタイプを区別しています。すなわち（１）楔の端又前例論議（２）ソリタス論議（３）ドミノ論議です。ドーピングと反ドーピングに関するこれらの各々の論議を私は説明してみたいと思います。

（１）に関して、滑りやすい坂の楔の端、（例えば）アナボリックステロイドを許すことは、明記されていない問題点を私たちに投げかけるさらに進んだ前例（Pn）を認める先例を作るでしょう。最終ポイントが悪くなければならないことは、必要でしょうか？もちろんこれは、「滑りやすい坂」の表現の典型的な言語的意味です。にもかかわらず、人はここで形勢を逆転して坂が確かに再び見

られるかもしれないと主張するかもしれません（シューベルト、2004参照）。恐らく新しい表現は、そのような最終ポイントへの避けられない滑り（向上？）を捉えることを求められるでしょう。これは不徳／美徳循環の考えに幾分類似しています。ですからアナボリックステロイドの使用、EPO、人成長ホルモンや他の禁止薬物はエリート競技者が自身のオリンピックの夢を実現するのを認めてよいかもしれないと主張されるかもしれません。シテウス、アルテウス、フォーテウスの標語は進行します。すなわちより速く、より高く、より強くというものです。それは合法的に人間の力と卓越性での限りなき成長の追求を示すことが出来ます。

（２）に関して、滑りやすい坂のソリタス的考えは、その明白な区別を描くのが十分でないためにPが私たちにPnなどを一貫して否定できないようにさせる効果を持ちます。この論議は文献で多く見られます。例えば人は能力強化を栄養補給で認めますが、これらはどのように合理的に区別されるでしょうか？高地トレーニングは許されます、そこでこの効果をまねる高圧室は禁止することが出来ませんし、もし高圧室がその場合許されればさらに進んで行きます。この坂は、仮に前の状態と同じでなくても山から微量の砂を取ることがその山を私たちが理解し説明することを妨げるところでのソリタス逆説の形式を伴います。

そのような論議を伴う問題の中心は、漠然とした概念の考えです。ドーピングに関して根本的に自由な立場を主張したい人々は、この漠然さをうまく使用し次のようなソリタス論議を適用するかもしれません。すなわち治療的介入は、現在道徳的に認められており治療と強化の間のはっきりした区分がないので強化への介入は道徳的にまた許容されます。よく尋ねられるように、私たちはある人工器官の追加機能性と他の生物工学的な強化形式を真に断定的に区別することが出来るでしょうか？身障者競技者チャンピオンであるオスカー・ピストリウスの場合、国際陸上連盟は彼が有能な身体競技者以上に利点を明らかに与えられると裁定しました。人生の初期に両足を切断したピストリウスは、競争相手より多くの良い400mのタイムを持っており選手権レースで有能な身体競技者と競争しようと考えましたが、彼のストライドの長さが不利益を提供する技術によって変えられたという理由、（と言われているが）で却下されました。（註７）

（３）に関して、滑りやすい坂のドミノ概念では私たちはどのような物が滑りやすい坂の原因になるかをしばしば言及します。（例えば、デン・ハーグ、2005参照）ひとたびPが原因連鎖を与えられると与えられたPnなどに続くことを可能にし、それは徐々に悪い結果を引き起こすでしょう。

滑りやすい坂の論議のどのような点がドーピング支持者団体に対して使えるでしょうか？私たちが指摘できる恐ろしい結果、ドーピングは倫理的に弁護の余地がないと言うことが出来る正に最終ポイントはあるでしょうか？ドーピング擁護者によって採用される一つの特別な戦略は、滑りやすい坂の薄い楔の端の面の下ではっきり落ちます。彼らの運動のある局面は、疑問の余地のない善である治療効果を目的にするかもしれない一方で、（言わば）アメリカンフットボールでは（競技者の新しく高められた力のために）余りにも多くの骨折があり、そしてそれはケブラーのような新しい装具によって強化された尻や膝のような重要な骨格構造物でもたらされたとその後にもし大変同様な団体が論議したならば、私たちはどのように感じるでしょう。そして、もしこの事を受け入れたとすれば、私たちは、（2006年にレーザー手術を決定したタイガー・ウッズにもかかわらず）ゴルファーやアーチェリー選手また、脚が引き起こす新たなレベルの摩擦効果を弱めるために強化された脚アーチを持つ短距離選手を動かすための人為的な足に対する20:20の視覚以上の偉大な可能性を否定する合理的な倫理的当局との原理的立場を維持します。ここでドーピング支持者と彼らの典型的な自由主義支持者は、カス（1997）が「嫌悪感ある」とした強化領域にさまよい込みます。

それ故に考慮すべき一つの戦略は、（道徳的に防衛的な）最も薄い楔のドアを開ける賞品である医療上駆り立てられる論議を用いることであり、それは私たちが共通に感じ、続いて起こる嫌悪区別できない原理にあります。私たちは皆嫌悪を理解しているかもしれませんが、最初の修正の首尾一貫性や免れられないその後の矛盾するものを否定する論理的基盤を持たないように見えます。あまりはっきりと告げることなく、より多くのプロメテウスの目的を守るためにいかに多くの治療の正当性を用いる準備があるか私は驚きます。この巧妙な手段の例が医学倫理で見出されます。例証のためにカリフォルニアの認知強化研究所を取り上げます。研究所のウェブサイトのフロントページには目立つように「アルツハイマー病の何かを知っていますか？」とあります。「最近の研究の進展を見るためにクリックしてください。」様式は簡単です。すなわち正面玄関で治療し、出口で強化します。バーグマン（1984：36）は、自身の現代社会の技術使用の議論の中でこの論争的な戦略を20年以上も前に正確に見て取りました。すなわち

> これらのプログラムの主たる目的は、自然の支配であるように見えます。しかし私たちは、更なる明確さを求めるに違いありません。支配への願望は、権力の欲望、真の人間の侵略主義から正に湧き出るものでありません。それは最初から病気、飢え、苦役から人間性を解放し、学習、芸術、競技で生活を豊かにする目的に関連します。

遺伝学的に扱われたウイルス病の力を否定したいと思う者は誰でしょうか？人は非人間的な能力（ソナーでの探検）の移植で、生体内での光ファイバー会話あるいは反退化力で、線を引きたいと思うかもしれないでしょうか？（これらは人間でないに違いありません。仮説）

にもかかわらず、人は「ここで、仮に私たちが全ての

またあらゆるドーピングを認めて物事が自然に進歩するだろうと言った目的」を言うことが出来る運命的に明白な乗り場を指摘することが出来ません。しかしこの立場は問題あるでしょうか？はい、それは坂の底辺にあると思われる「悲惨な結果」を正確に特定することを確かに困難にします。同様に、それは仮に私たちが前例Xを認めれば、（いやしくも）これら後者の実践が前例とどのように関連するのか明白でない理由で、それが次に続くYやZの実践を認めるだろうと言うことを非常に困難にします。従ってそれは幾分適用可能かもしれませんが、滑りやすい坂を組み立てる前例形式は、ドーピング支持者に対するあらゆる場合に厳密に使用できるかははっきりしません。

この観点で考えると、ソリタスタイプの滑りやすい坂は膨れ上がるドーピング禁止を支援するために使えるかもしれません。ドーピング支持者は、治療実践と強化との関係が実際にどのように移行するのかを示さねばならないでしょう。あるいは、眼鏡、補聴器、人工器具、免疫などを高める予防接種などのように、ある容認された技術は大変ありふれたことなので自然と人工との境界を十分にはっきり描くことが出来ないという主張をしなければならないでしょう。

ドーピングを勧める多くのこの巧妙な手段に対して、私たちは先ずいくつかの概念的反論に目を向けるべきです。最初は、自然の論議に関して取り上げられることです。私たちはあることから他のことへの変化を特別はっきりさせることなく昼間から夜へ、赤から黄色への変化を知っています。従って、人は（言わば）遺伝また薬学的な治療のＴ１、Ｔ２、Ｔ３と強化のＥ１、Ｅ２、Ｅ３などのはっきりした区別を決めることが出来ないという簡単な理由で、Ｔ１とE20との重要な倫理上の区別はないということにはなりません。ウイリアムズ（1985）が述べるようにこの種の不確定性はある言葉の概念上の曖昧さのために生じます。にもかかわらず､広がった述語｢塊｣の不確定性は、「治療」また「強化」に等しく当てはまりません。それらが認める自由度は、ほとんどこれと同じくらい広くありません。

Pnが倫理的に異議あり（つまり悲惨な結果を描くこと）という理由でPnに反対する代わりに、ウイリアムズ以後は代わりに人は、あるべきでないところにPからPnへの移動が単に倫理的な気ままさであることに反対するかもしれません。ここで人は、悲惨な結果を具体的に上げることなく反対できるものを、原則的に知ることが困難であるということが出来ます。そしてこれは、文字通り厄介なことです。さらに、スポーツ自由論者は、「気ままさがなぜ悪いのか」と主張するかもしれません。ある簡単な例を上げましょう。広く共有される洞察力として、私たちは十分な理由も無く、人々を恣意的に差別すべきでないと考える生活環境があります。ヘルスケアは、明らかにそんな一つのケースであると考えられます。公的ヘルスケア・サービスや製品に対する絶えず増加する需要が与えられれば、任意なあるいは主観的性格の個人の選択に反して、臨床欲求のような公的に議論の余地ある規準によって典型的に管理されるべきそれらに接続することが主張されるに違いありません。

そしてドーピング支持、あるいはもっと広く強化支持において何もない立場は、優先順位をそのままにしてそのような目的を許すように思えます。新しい遺伝学に基づいた臓器再生からより普通の人工補充装具までのような治療の医療技術における進歩を誰も正しく支持しないでしょうか？ここに介入の目的がはっきりと医学的に定義され、手段が厳密に規制されます。このことは、ソリタスタイプの滑りやすい坂を採用することから自由主義的ドーピング者を防ぐものです。しかしながらそれはどこで終わるでしょうか？防衛的なテロスの不在の中で、それ以上のより多くのメダルの愚かなマントラ、明白に事実上規定される目的（無制限の「強化」の旗を越えて）のより一層の栄光（狭義に考えられた**シテウス、アルテウス、フォーテウス**）（註８）、エリート競技者、そのコーチや医学的に支援するチームは、同様に人間の自然と可能性の潜在的に無制限な変換に抵抗すべきであることを私は示唆します。なぜなら、もしあらゆる変換が原理的に「強化」として数えられれば、その場合強化として数えられることは何もないからです。言葉の正に目標は、使用不可に陥るでしょう。このようにそれは、一般にドーピング支持団体に対するある強力な論拠に思えます。―気ままな滑りやすい坂―は、強化として彼らが述べる全てのものは善の概念を単に個人の選択と消費であるとする単なる自由意志論の技術的拡張でなく、積極的な標準力で確かに満たされていることを彼らに示すための挑戦を提供します。

３．反ドーピングのアリタイックな（徳的）根拠

私はこれまでドーピング禁止に賛同して、ある標準的な論議が、矛盾や不足であったりすることを一貫性を持つ妥当性で示そうとしてきました。さらにドーピングと限りない強化に対して最終的な分析として、私たちは滑りやすい坂の論議をどう考えるべきかを示そうとしてきました。ドーピングと反ドーピングの倫理－価値的な根拠についてどう考えるべきでしょうか？確かに、ドーピングにとって何が悪いかの徳的な根拠とドーピングの産物と過程を自由化しようとする人達が問題の核心に迫るだろうと信じています。

滑りやすい坂に起因する恐ろしく気ままなことに関する合理的な論議は、どんなパフォーマンス強化あるいは確かにドーピングを希望し競争から制裁どころか追放に直面しない競技者は使用を許されるべきだと考える哲学者あるいは社会科学者を納得させないかもしれません。しかし行為それ自体の正当性あるいは誤りの議論に対する合理的な論議を制限することは、ドーピングごまかしの特徴を考慮しないことです。さらに、徳の倫理において相対的にうまく配列された傾向にみられる感情と行動、思考の混合物として良い生活の生活様式を考えることは、必須と思われます。仲間の競技者に敬意を抱くこ

とは、あることですがそれへの感情は別のことです。そして高潔な行為は、この点で全体的なものであるべきです。従って私たちは、単に競技者がドーピングについて考えることではなく、重要な他の競技者や競技者自身の感情に関してまた特徴的に感じることや理由に関心を持つべきです。

もちろんドーピングした競技者に付随する多くの悪があるかもしれないことも事実です。たとえ説明の枠組として全て選択した事柄を強要することができなくても、発見的価値を持つ中庸の教義を適用することを思い起こしてみましょう。私たちは、ドーピングした競技者の性格に対して賞賛に値することあるいは罪に値することについて何と言うべきでしょうか？これらのいくつかは、－スポーツを規制するルールに照らして妨げられない偉大さであるべきとする願望のような、正に何かが欠けているかもしれません。あるいは彼らは公正な要求というものを感じないかもしれません。つまり彼らの相手は、彼らがするように競争して勝利する平等な機会を楽しむべきです。他方で、ドーピングした競技者は、自らの不節制として考えられるかもしれません。すなわちこれまでの英雄と張り合う願望が強くなるので、公平なスポーツの競争の要求に盲目になるかもしれません。性格上欠けている両者の欠点の二つの悪を私は、徹底的な論議よりむしろ例によって展開したいと思います。つまりドーピングした競技者に影響を与える（**プレオネクシア**）公正の欠乏か欠如と同様な彼らが持たないか不十分な見せ掛けの美徳恥（**エイドス**）の欠落です。

4．プレオネクシアの悪

美徳としての正義の議論の中でアリストテレスは、**プレオネクシア**が全ての不正義に付随する悪であると主張しています。私は、ウィリアムズ（1980）のそのあまりにも野心的な適用の批評を受け入れますが、一般的な立場のためにあるいは対して主張しようとは思いません。私は、むしろドーピングのごまかしの場合に対するその特殊な適用に関心を持ちます。まず、哲学者にとっては正義の二つの局面を区別するのが典型的です。すなわち（誰がいつ、どこで、なぜ、何を得るかという）配分と（いかにその問題が適切に訂正され続いて生じる不正という）修正（レクティフィカトリー）です。さらにアリストテレスは、美徳と関連するただある種の善の中のものである「特殊な正義」に道徳的に関わるとして正義を区別します。マッキンタイアーの体系で、私たちは、これらを外在的善と呼んできました。アリストテレスは、これらの善を「分割可能」と捉えていますので、人が一部分を得ればその他は得ることが出来ない場合ですからそれらは分配されます。マッキンタイアーは、この特性を「排他性」と言及します。それらは、このように競争の典型的な目的物です。解釈上の余地で私たちは、人がそれらをもっと多く、他者より多く望んだりあるいは単に欲張りである場合に、特別な善に関する悪としてプレオネクシアを考えることが出来ます。

人種差別に関する第６章で私が述べたように、不正な特徴から不正行為を区別する際にアリストテレスに従うことは重要です。ドーピングすることは、典型的に無知な行為でしょうか？私はそのように思いません。私たちは、与えられたものが栄養剤であったという策略の下で不正な薬学的強化を強いられた若い東ドイツの選手のような受動的感覚でドーピングする競技者を区別しなければなりません。（シュピッツァー，2006）同様に私は、チームドクターのアドバイスで「鎮痛剤」を使用した2000年のシドニーオリンピックでの17歳のルーマニアの体操選手のアンドリア・ラドカンに対してはかなり同情します。その後の検査では禁止物「プソイドエフェドリン」を含んでいたことが示されました。そしてドーピング規制の厳格な責任の下で彼女は競技から追放されました。ラドカンが床と跳躍競技からメダルを獲得し、全ての競技後に尿検査が実際に行われたと言う理由は、珍しくそれは思われるかもしれません。多分この判断は、少なくとも配分と修正正義両方に対するある識別能力を表わします。にもかかわらずこの皮肉な結果は、違いを示します。すなわち全ての競技での演技に先立って禁止薬物が見つかり、演技に対して厳格に責任がありましたというラドカンの動機が単に悪かったことは示唆されませんでした。ラドカンは、ドーピング規則の規制に反するが、自らのドーピング不正行為でないということがこの見方から様々な意味を作ります。

要するにドーピング不正行為は、別のタイプの特性です。感情についての議論の中で、私は、時間を越えて持続するものから顕著な出来事を区別しました。第６章でもそうであったように、より普遍的なものから１回限りの、あるいはそれ自体で示されるある状況下での行為とそれ故にスポーツ人間（する人）の性格の一部を形作る思考を区別することが必要です。すなわちそれは気質的なものです。このように私たちはドーピング不正行為が何かを欠きそして人が何かを表すと言うことが出来ます。他人に対して嫌悪を感じたり彼らの魅力に抵抗して勇気を持つ間、人ははっきりした正義感を欠きます。なぜならそれは、人が正にそれ故高貴にある行動計画を構想し判断して考えるように習慣的にさせる正義の美徳の構成物であるからです。さて公正でない人間は、私たちの議論にふさわしくない多くの点で動機付けられるかもしれません。すなわち多くの点で彼らは、正当な結果を達成することについて単に関心がないかもしれません。しかしドーピング不正行為の組織的な性質－それらは、活発な薬物の力が身体内に残存し検知できる時のサプリメントの服用、タイミング、合意という他のものの助けを借りて整えなければならないという事実、あるいはそれらが競技外でのテストを回避するに違いない継続時間、あるいはそれらがドーピング剤また手段を隠そうとする他の薬物－は、組織的な詐欺を指摘します。

ドーピング競技者が達成しようとするものは何でしょうか？貧欲症的として私たちが人を説明するのはなぜどうしてでしょうか？これについて、貧欲症的ドーピング

者は単により多くを望まない人であることを私は示唆したいと思います。というのは単に欲張りの傾向を示すに過ぎないと言うことです。なぜなら欲張りは、十分なものが決して十分でないことだからです。スパーショット（1994:188）はこれを論理的に際限のない欲張りと呼んでいます。それは極上の悪癖であり単なる１回限りの情熱ではありません。（スパーショット、1994）にもかかわらず、貪欲的としてドーピング不正を述べる際に、私は人の欲張りに対する不正の関係を強調したいと思います。つまり決定的に、ドーピング競技者は人が当然与えられる以上のものを望むと言うことです。人は外在的に分けることのできる善、すなわち富、支援、評判さらには記録本に掲載される名誉さえ誤って得るかもしれないので、不足していることは、明らかに公平を気にしないことの一つです。人が持たない権利を強欲に望むことです。それは貪欲さに等しいものです。ウイリアムズ（1980）は、心の中とアキレスの魂の貧欲症のある局面を定めています。彼は栄光を望み、他の誰もそれを共有しないようにそれを望みます。このことは、私に衝撃を与え、貪欲症的ドーピング不正の求めるものの少なくともある重要な局面です。**プレオネクシア**の不徳を持つ競技者は、単に十分さ、あるいは適切な報酬であるものを望みませんし、彼らは自らの義務、献身、能力によって、要するに功績によってではなく与えられる資格かどうかに関わり無く他者よりより多くを望みます。

５．見かけ上の美徳エイドス（また恥知らずの不徳）

私たちは美徳としての恥知らずをどう考えるべきでしょうか？それは変な考えです。徳のあるスポーツ人は何に恥を感じるでしょうか？一方で、それは現代の個人主義的文化を罪の文化（G. タイラー、1985）として典型的に考えています。誤った行動は感受性に内面化されます。つまり規則、規律、規範を破ることに対しての、罪に値する内面化や間違った行為への呵責の念です。典型的に言えば、恥は失敗程の罪でなく、私的より公的なものです。ですから当たり前の論議として、（註９）恥の文化は名誉のような社会規範に基づきます。文化に社会化される時、私たちに役割を置く社会の要求に沿えない場合に私たちは恥を感じます。そして私たちは顔を覆います。

なぜ私たちは競技者にある恥知らずであることを育成しようと思うべきでしょうか？それはさておき、その要求はスポーツ倫理の堕落と考えられます。さらにはその問いはより多くの意味を持っています。すなわちなぜ私たちは恥を感じる能力を育成しようとするのでしょうか？この事はより期待できそうに思えます。反対の立場を想像して下さい。例えば現代のエリート競技でドーピングに浸ることは職業上の危険と大差ないものと見なされているかもしれません。チャーリー・フランシスは、ベン・ジョンソンについて、もし彼が単に計画―興奮剤と服用から手を引く時を分かっており、ドーピング薬物の鑑識を妨げるために隠蔽手段を用いる時を分かっている―に忠実であったならば、捕まらなかったであろうと述べました。その問題に取り組むこの態度は、技巧家的（technicist）です。つまり倫理学の一つでなく、単にタイミングの問題です。なぜならば、道徳的非難の力を教えられていない競技者は、そしてここでは少なくとも私がジョンソンに対する考えはフランシスの考えと同様ですが、恥の恐れは存在しません。競技界からの破門の恐れはありませんし無視できるくらい弱いものです。仮に感じられたとしても力は、潜在的な栄光と富の範囲内で減少します。

もちろん恥は、強力な社会的規制装置です。私たちは、自身の存在を形成する社会から自らをそらすために、恥の力、集団から私たちを分けるその能力の力を正しく認識する時、それは確かに強力な予防薬の機能を果たすことができます。そして私たちは皆、時として道徳の欠如を示すでしょう。他のもの以上に。そして、恐らく、全てではありませんがエリートスポーツで大部分がある領域での途方もない報酬に直面して。

ウイリアムズ（1993:87）は、私たちの今の関心事に類似したソホクレスのプレイである**ピロクテテス**での恥の議論を提供します。ずる賢いオデッセウスは、ピロクテテスに対してだます行為をネオプトレムスにさせようとしています。彼の詭弁的な策略でオデッセウスは、同時に彼が品位を下げる予め無意味な恥を和らげて、一方でネオプトレムスの美徳に訴えます。すなわち、

> 息子よ、私はお前がそのようなことを言ったり下品な策略を用いるという性格でないことを知っています。しかし勝利を掴む事は喜びであり、だから大胆であるべきだ。

ネオプトレムスの最初の返事は、私たちが全てのエリート競技者が口にすることを期待するものです。すなわち、

> 主よ、私はみすぼらしく勝つよりむしろ立派に敗れることを好みます。

私たちが彼の勇気とエイドスの慣例（the habitutation）を喝采する前にオデッセウスの詭弁法の力が勝利を得ます。悲劇のギリシャ英雄儀礼に忠実になりなさい。そうすれば彼が思う潜在的な栄光によって説得されます。すなわち、

> 分かりました。私はそれを行い恥を片隅におきたいと思います。（ウイリアムス、1993:87より全て引用）

この流れの中で、しかしよりはっきりした美徳で、ジャーナリストのダグ・ビダルは、前オリンピックのスケートの金メダリストでノルウェーのIOCメンバーであるアンドレ・サンドラルにインタビューしました。彼は次のように言いました。「ドーピングを巻き込んだ所有は、ノルウェー人が犯すことのできる第二の最悪の犯罪です。私の見解では児童虐待だけが人々を一層うんざりさせます。ドーピングは国家に対する大きな背信行為です。」これは問題をかなり大げさに演じるように思えま

す。デンマークの学者であるアスク・ベスト・クリスチャンセンは、デンマークのサイクリストは恥がドーピングに対して強力な抑止力であると表明したと言いました(註10)。これは広範なスカンジナビアのスポーツ精神における何かか、あるいは確信できませんが、健康とスポーツを一緒にして常に祝福されるより純粋な文化を持った小国家の産物かです。一方で、いくつかの場合、恥の死は言わば大げさに言われてきた報告であると私たちは言うことができます。しかしながら私たちが意志の弱いドーピング者をたしなめる前に、自称ごまかしについての警告の言葉がまたあります。スチュワート（1982）は以下のように述べます。「もし人が恥じている状態を手柄にするならば恥の行為を和らげ、そして再び繰り返します。」（スパーショット、1994:392に引用された）

恥の規準が不条理な場合、恥が蝕む面を持つことは同じく真理です。人は他の事柄の中で、「彼女たちを売春に運ぶであろう」（ハーグリーグス、1994:392）という恐れに対して婦人が自転車を使用することさえ妨げるその複雑な社会規範とともにビクトリア朝の英国の支配力の例をただ考えねばなりません。同様に、人はアメリカの大学生の社交クラブ、あるいはアパルトヘイト時代の南アフリカの警察のような集団での名誉規範を考えます。それらは集団への結束と忠誠の名の下で、20世紀かなりな人口を占める婦人と有色人種に対する暴力を促進しました。

プレオネクシアと**エイドス**は、スポーツ倫理の点で何を指摘するでしょうか？確かに私たちはよく知られたアリストテレスの教育学的基礎とその慣例に引き寄せられます。つまり良いスポーツ人や良いスポーツ生活を構成する感覚、知覚、認識や行為の様式です。もし子どもがスポーツの価値の重要性を教えられなければ恥が避けられるべきことをどのように感じるのでしょうか。つまり彼らは手の届くまた届かない範囲内で何を知るのでしょうか。また彼らは平凡と卓越のパンテオンのどこに立つでしょうか？

ここで役割モデルの見解は、全く批判的です。今までで最も素晴らしいスポーツジャーナリストの１人であるヒュー・マッキルバニは、ドーピングの不正行為以上に家族的に似ている実践である、フランスのフットボール選手のテリー・アンリの「飛び込み」（国際サッカー連盟の見解では「模擬実験」）戦術を非難する機会を以前に持ちました。今アンリは、フットボール界で、見ることが私の喜びであった最も上品な選手の１人です。そしてそれ以上に、試合の他に社会的な責任性を高く尊重されています。彼を見るにつけ、だましてペナルティーキックを得るのは実に悲しいことです。シェークスピアはその事についてまさに正しく。すなわち

夏の花は夏の甘い香りを持っています。
しかしそれがあまりにも強いとただ生きるか死ぬかだけです。
しかしもしその花が卑しさを持って悪い影響を及ぼせば、卑しい雑草は尊厳に立ち向かいます。なぜなら最も甘いことは、行為によって最もすっぱくなるからです。腐った百合は雑草以上に悪く匂います。（ブース、2000:ソネットXCIV）

私たちが教師また政治家よりエリートスポーツ人をより高いレベルで評価していることは真実であり、多くが道理的でありません。それは私たちがこれを行う事実の問題のみならず、また私たちもそれを行う善からです。現代では道徳劇が演じられるのを大衆はどこか他のところで見るでしょうか？それは、丁度個々のスポーツ人が彼らが命ずる異様な高給に対して支払う代償のように、現代の小さくなった道徳資源に対して私たちが支払う代価です。

エリートスポーツ人の競争的な責任性や他の価値的な考察を試みることは、当然のことながらスポーツに教えを受けます。これは、それが古くて急を要するように重大な問題です。しばしばそれは、私たちに限界を教える物語でもあります。またそれは、単なる身体の卓越性や**シテウス、アルテウス、フォーテウス**の見せ物の競技場としてでなく、倫理的に価値ある実践として見なされたスポーツの卓越性の裁量の基準に対する正しい評価です。すなわち何時もそれは―私たちの最高の模範者の役割モデルです。フォアハンドのトップスピン、短距離スタートでの頭の位置、レイアップのバスケットボールの防御、宙返り、ヒップスローの理想的なタイミングを果たすのにどれぐらいの時間を費やすのでしょうか？私たちが努力する目的、理想、目標の適切性を考えれば、自身が果たすのにどれぐらいわずかな時間でしょう。

結論

本章で私は、ギュゲスの指輪神話の考察から始め、いくつかの滑りやすい坂の議論を利用し、そしてドーピングと反ドーピングの両方の動機を理解することの助けになるアリタイックな（徳の）語彙の実例を指摘しました。少なくともギュゲスの指輪が私たちに教えるものの一部は、人間が自らの目的（しばしば思慮不足の）を果たすためにどんな事でもするかもしれない自らの行為に責任を負うべきことを感じない場合です。彼らは彼ら自身以上に大きな力がないと感じています。多分彼らは曖昧さや恥のいずれも感じることなく不適切な栄光に浸る事ができると感じています。恥は多彩な歴史を持つかもしれませんが、私たちは浴槽の湯に赤ん坊を投げ入れないほうが良いように思います。恥知らずは、彼ら自身の意志を越えた基準がないように感じます。性格の改造は宗教や神話にそれ程共通な外面ではありませんし、これらの考察は若いスポーツ人の成熟した心理を引き付けるものを持つ一方で、私たちは美徳や不徳の回避の洗練に努めたほうが良いと思えます。

註記

註１.もちろん全てがそうではありませんが、例えばMiah（2004）, SavulescuとFoddy（2007）を参照。
註２.この論議の詳細はSimon（2004）を参照。
註３.例えば国家関与による最大級のドーピングに関する内部告発を参照Spitzer（2006）。また医学的監視下におけるドーピングが実際的、ただ原則的でないという論議を参照Holm（2007）。
註４.McNamee（2008）「正常と異常概念の展開」に関する著作から例示。
註５.彼の高度な機能的異常性でもってしても成功は、ドーピング禁止以前にホルモンの増補に由来するものであるとまだ示されるべきであろう。
註６.さらに、Sternglantz（2005）が以下に示すように。
註７.裁定がいかに多くの水準で競技的であっても。Edwards（2008）参照。
註８.人はまた古代ギリシャから由来する中で、この特別なモットーが公的見世物の独断的な拡張が展開されたローマ帝国の過剰な行為の中に埋め込まれると認めるかもしれません。人は「モア･クリスチャン、モア･ライオン、モア・ゴーリング！」の試合で自らの恐怖心と崇拝の世論表明を宣言する起立したネロをイメージするかもしれません。より詳細は、Allisonの論評「シテウス、アルテウス、フォーテウスadabsurdum」（2005）を参照。
註９.しかしながらBernard Williamsは、典型的な恥の文化の二分法は余りにも粗いものであると示唆しています。彼の「恥と必要性」（1993 :75-102）を参照。
註10.Hanstadの私的報告（2007年９月３日）から引用。すなわち、クリスチャンセンの所見は、ドーピングに関して私が、重要な要因であるエリートスポーツにおける恥の喪失を提案した場面で提供した反ドーピングへの返答委員会によるものです。

翻訳者付記

本稿は、MIKE, MCNAMEE（マイク・マクナミー）著“SPORTS,VIRTUES AND VICES”『スポーツ、徳と不徳』（2008）英国ルートリッジ社、の「第10章　ドーピング」の全訳である。第10章では、まず公平性、害、パターナリズムなどドーピングを許容する典型的な論議がスケッチされている。その結果ドーピングが誤りであると明確に断言できるポイントを論理的には決定できないことが示される。一方で、滑りやすい坂を助長させる薬学的意味が論議される。合わせて、スポーツ倫理学でのアリタイック（徳）な立場から人々をだます不徳が示される。さらにドーピング競技者の性格にみられるプレオネクシア（貪欲）とエイドス（恥）について考察されている。

著者のマイクは、現在55歳、英国　カーディフ大学（UWC）スウォンジー校で応用哲学教授を勤めている。彼の研究領域は広範で、スポーツ倫理学から医学倫理学へさらには産業倫理学にまで及んでいる。主な役職は、英国スポーツ哲学会会長、若く30歳代にして国際スポーツ哲学会会長も歴任してきた、正に国際スポーツ哲学界の泰斗でもある。

彼との関係は、訳者が英国で約１年間の在外研究期間中（1999.5～2000.3）のホスト教員としてお世話になりました。そのような関係から今日まで長らく親交が続き、彼の上記著書の出版を機に日本での翻訳出版の約束をしていたのですが、これが諸般の事情からままならなくなり、今回このような形で著作の一部を公開した訳であります。